水野谷武志ゼミI

参加学生数17人

水野谷 武志
地域経済学科
教授

観光まちづくりの可能性と課題

研修地：浜中町

【 研修目的 】

霧多布湿原ナショナルトラストの取り組みや浜中町の観光政策について関係者と意見交換し，また浜中町のエコツアーを体験することによって，浜中町の観光まちづくりの可能性と課題について理解を深める。

研修地・日程

8月25日	移動
8月26日	霧多布湿原センターを訪問し、センター職員による講演 センター職員による霧多布湿原案内バスツアー エコツアー体験（長靴ツアー：霧多布湿原散策）
8月27日	エコツアー体験（無人島ツアー：ケンボッキ島散策） エコツアー体験後にツアーガイドの瓜田氏による講演 浜中町役場を訪問し観光協会担当職員による講演・意見交換
8月28日	霧多布湿原センターを再訪問し，センター職員と研修成果についてグループディスカッション
8月29日	移動

写真キャプション　1 霧多布湿原センターでの講演。2 霧多布湿原の木道散策。3無人島に行く船に乗り込む。4 浜中町職員による講演。5 宿で勉強会。6 霧多布湿原センターでグループディスカッション。

【 総 括 】

霧多布湿原ナショナルトラストは、浜中町の霧多布湿原を保全するために2000年に設立された認定NPO法人であり、2005年には霧多布湿原のビジターセンターである霧多布湿原センターの指定管理者となり、保全活動の他にも観光やまちづくりなど様々な活動に取り組もうとしていることがわかった。特に、環境を保全しながら湿原をふくめた浜中町の豊かな自然を体験できる各種エコツアーは、観光客を引きつける魅力を備えるとともに、そのツアー料金がツアーに関わる地元住民やセンターの収入となり、地域経済の好循環に結びつく可能性がある。各種のエコツアーの中から「長靴ツアー」と「無人島ツアー」を今回体験し、自然の素晴らしさと楽しさを実感する中で、ツアーガイドの役割が大事であることも実感した。一方で、センター職員との意見交換によって、ツアーの準備やガイドの要員確保は容易ではないのでエコツアーのさらなる充実に課題があることもわかった。また、浜中町役場（観光協会担当者）へのヒアリングとも合わせて考えた結果、町役場と霧多布湿原ナショナルトラストとのさらなる連携強化の実現が浜中町の今後の観光まちづくりにとって1つの鍵となる認識を得ることが出来た。

学 生 研 修 記

越後 和磨
地域経済学科２年
小樽潮陵高校出身

「観光産業」におけるまちづくり

水野谷ゼミでは、「観光まちづくりの可能性と課題」をテーマに調査しました。日本には大都市と呼ばれる、人が多く集まり活性化している地域と、反対に都心部に若者が流れていき、観光客などもこない過疎化している地域があります。その過疎化している地域の打開策として、現在注目されているのが「観光産業」です。私たちは北海道の浜中町を訪問し、調査しました。浜中町にある「霧多布湿原ナショナルトラスト」と呼ばれる、湿原を買い取り保全することを目的としたNPOは、その湿原に残る自然を多くの人に知ってもらうため地域住民と協力したエコツアーを開催し、ツアーを通じ観光客を呼び込んでいます。私たちも体験し、とてもたのしいツアーでした。しかし、冬から春にかけてのツアーが少ないので観光収益の減少が課題となっていました。私たちは浜中町で観光産業の重要性や、地域住民の協力が必要不可欠だということを改めて実感しました。

櫻井 里菜
地域経済学科２年
東海大学付属第四高校出身

浜中町エコツアー「長靴トレッキング」

私たちは北海道厚岸郡浜中町を訪問し、霧多布湿原センターが行うエコツアーを実際に体験してきました。霧多布湿原センターは、季節ごとにエコツアーや自然体験を行うことで地域との交流をはかり、霧多布湿原のファンを増やす活動を行っています。私たちが実際に体験したエコツアーの一つが長靴トレッキングです。雨具と長靴を履いて、ぬかるんだ湿原の中を歩くという、湿原を体で感じることのできるツアーです。足場が悪く、ズブズブとした湿原を足で感じながら、ガイドさんのお話を聞きつつ、動物の足跡を探したり、鳥の鳴き声を聞いたり、季節の草花を見たり、普段の生活では体験できないことができて、とても記憶に残ったツアーでした。このような自然を体験するツアーは、その場所のことを熟知したガイドさんがいて初めて成立するもので、湿原の魅力を来訪者に伝え、ファンを増やす上でとても重要な役割を果たしていると感じました